# 「小学校教科内容論体育」受講者の体育および器械運動に対する意識に関する研究

小山宏之*・和藤哲史**・西川啓子**
（*京都教育大学，**京都教育大学非常勤講師）

# A study on Students' Attitudes for Physical Education and Gymnastics in Classes for Teaching Methods of Elementary School Physical Education

Hiroyuki KOYAMA・Satoshi WATO・Keiko NISHIKAWA

2022 年 8 月 30 日受理

**抄録**：本研究の目的は，小学校教員免許状取得のために必修である「小学校教科内容論体育」の受講生の体育および器械運動に対する好意性を明らかにすることであった．当該授業受講生 1 回生に対して体育および器械運動の好意性に関するアンケートを行った（回答数，222 名；回答率，89.5%）．主な結果として，①小学校体育授業を「好き」と答えた学生は全体の 69.4%で，「嫌い」と答えた学生は 19.4%であった．②器械運動について「好き」と答えた学生は 32.9%で，「嫌い」と答えた学生は 41.0%であり，体育全体の好意性と比較して，器械運動の好意性は有意に低かった．③器械運動の種目別の好意性では，鉄棒の好意性が最も低く，「好き」は 27.9%，「嫌い」は 53.6%であった．以上およびその他の結果も踏まえ，体育授業の指導能力の向上には，各種目の好意性が高いことも重要であることから，当該授業の実施にあたっては，基本的な技ができることや指導法の習得に加えて，受講生の体育や器械運動に対する好意性の変容を促す授業内容が重要であることが示唆された．

**キーワード**：教員養成課程，小学校体育，器械運動，受講生の好意性

## Ⅰ．はじめに

小学校教員は全てあるいは大半の教科を担当することが一般的であるため，多くの教科の指導能力が要求される．したがって，小学校教員を養成する大学の教員養成課程認定においては，「教科及び教科の指導法に関する科目，教科に関する専門的事項」として，国語，社会，算数，理科，生活，音楽，図画工作，家庭，体育及び外国語の教科ごとに授業を開設される必要があり，著者の所属する京都教育大学においても，全 10 教科で「小学校教科内容論」が開設されている．特に，本学で小学校免許を修得するには，体育領域専攻を除いた全ての専攻で「小学校教科内容論体育」の履修が必修となっており（京都教育大学，2022），体育の指導法に関する学びが重要視されている．

体育は，幼少期からの運動経験，体力や運動能力，運動習慣などの影響により，運動の「できる」・「できない」がはっきりとでやすく，得意・苦手，好き・嫌いの好意性といった意識が芽生えやすい教科である．そのため，小学校教員を目指す学生の中には，教育実習で体育の授業を担当することになった場合に指導に対する不安が生じやすいことや，実際に小学校教員となる学生においても，体育の指導に不安を有している場合が多いことが報告されている（木原ら，2003；松田，2016）．

小学校教員として体育授業を担当する上で，その教科指導に必要不可欠な資質・能力の 1 つとして，学習内容である運動に対して肯定的な態度や意識を持っていることの重要性が指摘されている（三浦ら，2001）．そのような中，小学校教員を志望する学生が持つ体育に対する意識について，複数の大学で調査が行われている．川田

（2018）は私立大学の教職科目受講生に対して運動や体育への好意性を調査し，81.4%の学生が体育を「好き」という意識を有していたと報告している．また，国立大学の教員養成大学での調査の例として，廣兼と平井（2007）は教職科目受講生の66.9%が，福地と中雄（2018）は教職科目受講生の60.9%が体育に対して「好き」という意識を有していたことを報告している．さらに，川田（2018）は好意性の男女差にも着目し，体育に対する好意性は男子の方が高いことも報告している．このように，小学校教員志望の学生は体育に対しておおむね高い好意性を有していることが報告されているが，その割合は大学によってばらつきがあり，他大学の状況を本学にそのまま当てはめることは難しい．三浦ら（2001）が指摘するように，小学校体育授業の担当者として運動に対する肯定的な態度や意識が必須ならば，本学の学生の状況を適切に捉え，大学授業においてその意識をより肯定的に変容させていく必要があると考えられる．

小学校の体育実技の内容は6領域で構成され（文部科学省，2018a），本研究が対象とする小学校教科内容論体育は，6領域の中の器械運動と陸上運動を取り扱う授業である．器械運動は「マット運動（以下，マット）」，「鉄棒運動（以下，鉄棒）」，「跳び箱運動（以下，跳び箱）」の3種目で構成され（文部科学省，2018a），その特性として，器具を使って「技」に挑み，それを達成したときの楽しさや喜びを味わうことの出来る個人的な運動であり，「できる」・「できない」の技の完成が明確で，練習の目標がつかみやすいとされている（堀江ら，2007）．しかし，この「できる」・「できない」が明確であるため，教員志望学生が体育実技の中で最も自信を持っていない運動領域は器械運動であるという報告もある（宮平，2017）．繰り返しとなるが，学習内容である運動に対して肯定的な態度や意識を持つことが，教科指導に必要不可欠であることを踏まえると，体育全体に加えて，個別の運動領域に対する受講生の好意性を把握した上で，授業を展開していくことが重要であると考えられる．

そこで本研究では，小学校教員免許状取得のために必修である「小学校教科内容論体育」の授業改善を図る基礎資料として，受講生の体育および当該授業の内容である器械運動に対する好意性を明らかにすることを目的とした．

## Ⅱ．研究方法

### 1．調査対象者

本研究では，体育領域専攻以外の専攻において，小学校教員免許状取得のために必修科目である「小学校教科内容論体育」を受講する1回生248名に対して，後述する内容のアンケート調査を行った．調査に際しては，調査内容，目的，データの取り扱い，及び本調査が授業成績には影響しないことを説明した上で協力を依頼した．得られたデータのうち，回答に不備のあったものを除いた222名（男子：76名，女子：144名，性別選択なし：2名）を分析対象とした．なお，各専攻の内訳は表1に示した通りである．回答率は89.5%であった．

表1　調査対象者の領域の内訳

| クラス | (a) | | (b) | | | (c) | | (d) | (e) | | (f) | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 領域 | 教育 | 国語 | 幼児教育 | 発障 | 英語 | 家庭 | 音楽 | 理科 | 社会 | 技術 | 数学 | 美術 | |
| 人数（人） | 28 | 21 | 18 | 12 | 17 | 13 | 13 | 23 | 38 | 9 | 23 | 7 | 222 |

### 2．アンケート調査の内容および調査方法

アンケートはGoogle Forms（Google社）で作成し，小学校教科内容論体育における器械運動の第1回目の授業において各自の携帯端末でアクセスさせた後に回答させた．表2はアンケート項目を示している．設問は，(A) 運動・スポーツの好意性に関する2項目，(B) 小学校から高等学校までの体育授業に対する好意性に関する4項目，(C) 器械運動の運動種目に対する好意性に関する4項目，(D) 小学校の体育授業において，器械運動の授業の実施に対する自信に関する4項目を設定するとともに，各対象者の特性として，(i) 領域，(ii) 卒業後の進路志望，(iii) 運動経験についても回答させた．なお，項目（A）～（D）は表2に示したように5件法で回答を得た．

表2　アンケート調査の設問と選択肢

| |
|---|
| (A)「運動・スポーツは好きですか？」<br>（一）からだを動かすこと，（ニ）運動・スポーツをすること<br>①嫌い　②やや嫌い　③どちらとも言えない　④やや好き　⑤好き |
| (B)「体育の授業は好きですか？」<br>（一）小学校時代の体育，（ニ）中学校時代の体育<br>（三）高等学校時代の体育，（四）体育授業を総合的に考えて<br>①嫌い　②やや嫌い　③どちらとも言えない　④やや好き　⑤好き |
| (C)「器械運動の授業（内容）は好きですか？」<br>（一）マット，（ニ）鉄棒，　（三）跳び箱，（四）器械運動を総合的に考えて<br>①嫌い　②やや嫌い　③どちらとも言えない　④やや好き　⑤好き |
| (D)「小学校体育の授業で，器械運動の授業を行う（教える）自信はありますか？」<br>（一）マット，（ニ）鉄棒，　（三）跳び箱，（四）器械運動を総合的に考えて<br>①自信がない　②やや自信がない　③どちらとも言えない　④やや自信がある　⑤自信がある |

### 3. 統計処理

アンケート調査の結果について，5 件法で選択させた項目については，①を 1 点，②を 2 点，③を 3 点，④を 4 点，⑤を 5 点として集計した．なお，アンケート結果の性差の検討では，性別の項目で「選択なし」と回答した学生を除外して集計した．アンケート結果の性差および運動経験による差の検討は Mann-Whitney の U 検定を，体育に対する意識と器械運動に対する意識の差の検討は符号付順位和検定を，調査対象者の特性である運動経験の男女差の検討には $\chi^2$ 乗検定を行った．統計分析には SPSS22.0 を利用し，統計的有意水準は 5%以下とした．

## Ⅲ．結果および考察

### 1. 調査対象者の特性

（1）志望校種

各対象者の卒業後の志望校種について，小学校，中学校，高等学校，幼稚園，特別支援学校，その他の 6 種類で調査した結果，小学校志望が 47.3%，中学校志望が 19.8%，高等学校志望が 18.9%，幼稚園志望が 7.2%，特別支援学校志望が 1.4%，その他が 5.4%であった．この結果から，受講者の約半数程度が小学校教員となることを想定して受講していたことが明らかとなった．なお，小学校教員志望の学生や実際の小学校教員に体育指導の不安が多いこと（木原ら，2003 ; 松田，2016）を踏まえると，志望校種別の分析も重要であると考えられるが，本調査は授業の標準履修学年である 1 回生を対象とした入学直後の調査となることから，将来を十分に見すえた志望でない可能性もあるため，調査結果の志望校種別の比較は行なわないこととした．

（2）運動経験

図 1 は調査対象者の運動経験について調査対象者全体および男女別にその割合を示したものである．なお，本調査では運動の種類について，「体操」および「体操以外の運動」と区別して回答させたが，運動教室や課外活動での体操経験者は全ての年代で割合が小さかったので，「体操」および「体操以外の運動」はあわせて集計した．全体の結果では，運動経験を有する割合は，小学校入学前で 38.7%，小学校で 68.9%，中学校で 68.0%，高校で 55.9%であった．

男女による比較では，中学校および高校において男子が女子に比べて運動経験がある割合が有意に大きかったが（$p<0.05$），小学校入学前および小学校では有意な差は見られなかった．

これらの結果から，本授業の受講生は小学校から中学校において約 70%に近い学生が運動教室や課外活動で運動経験を有していたことが明らかとなった．本受講生が小学校および中学校時代である全国体力・運動能力調

査の結果を見ると，当時は現在も続く運動する子どもとしない子どもの二極化が進行していた時期であり，一週間の運動時間について，特に中学校女子では全体の 20%程度もの割合で 60 分未満の運動時間であったことが報告されている（文部科学省，2015，2018b）．このような背景から，本調査を行うにあたって特に女子では運動経験のある割合はそれほど多くないことを想定していた．しかし，調査結果では運動経験の割合が低い女子であっても 60～70%の学生が小学校と中学校で運動経験があったと回答しており，体育領域専攻以外の受講生ではあるが比較的高い割合で運動経験を有している集団であったと考えられた．

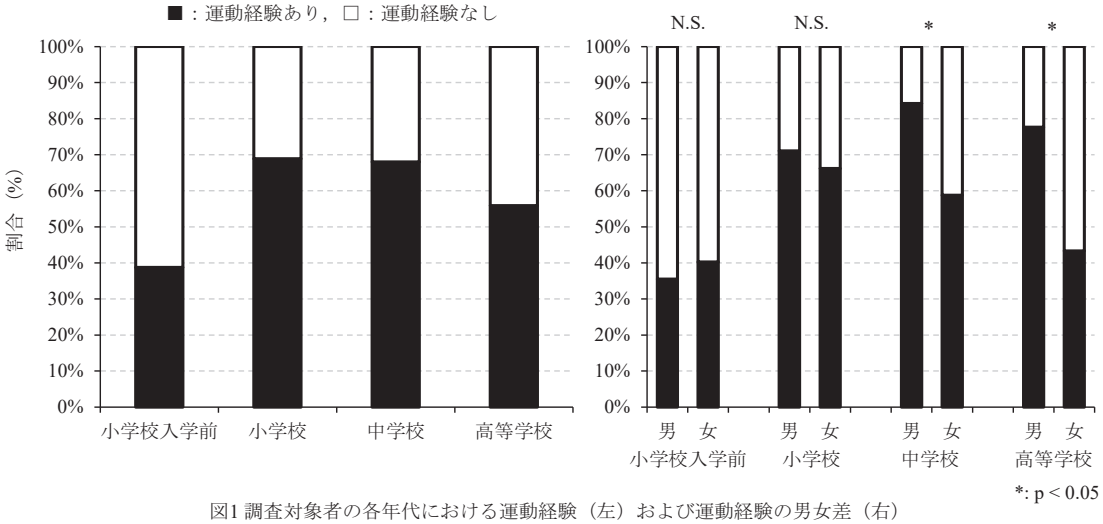


図1 調査対象者の各年代における運動経験（左）および運動経験の男女差（右）

## 2. 体育授業に対する好意性について

図 2 は小学校体育および，小学校から高等学校までの体育授業全体の観点から，体育授業の好意性について調査対象者全体，男女別，運動経験別にまとめたものである．全体では小学校体育授業および体育授業全体において，それぞれ 69%程度の学生が「やや好き」または「好き」と回答し，「やや嫌い」または「嫌い」と回答した学生は，小学校については 19.4%，体育全体については 14.4%であった．

男女による好意性の比較では，男子では小学校体育授業および体育授業全体のいずれにおいても 80%以上の学生が「やや好き」または「好き」と回答し，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生は，それぞれ 13.2%と 9.2%であった．一方で，女子では「やや好き」または「好き」と回答した学生はいずれも 60%程度であり，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生の割合は，それぞれ 22.9%（小学校）と 17.4%（体育全体）であり，小学校および体育授業全体の好意性において男女で有意な差が見られ（$p<0.05$），女子の方が体育授業に対する好意性は低かった．

運動経験による好意性の比較では，経験有りでは小学校体育授業および体育授業全体のいずれにおいても 70%以上の学生が「やや好き」または「好き」と回答し，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生はそれぞれ，17.1%と 11.7%であった．一方で，経験無しでは「やや好き」または「好き」と回答した学生はいずれも 50%程度であり，「やや嫌い」，「嫌い」と回答した学生の割合はそれぞれ，32.4%と 29.4%であり，体育授業の好意性について運動経験の有無で有意な差が見られた（$p<0.05$）．

これらの結果から，本受講生の約 70%は体育授業に対して「好き」という意識を持つ一方で，体育授業に対して「嫌い」という否定的な意識を持つ学生も約 20%の割合でいることが明らかとなった．これまで，小学校教員養成課程に所属する学生の体育授業の好意性を調べた研究は複数ある（表 3，三浦ら，2001；廣兼と平井，2007 川田，2018；福地と中雄，2018）．これらの報告と比較すると，本受講生の好意性として，「好き」と答えた学生の割合は同程度であったが，「嫌い」と答えた学生の割合がやや高い傾向にあることがみてとれた．さらに，川田（2018）の指摘にあるように，本学においても女子の方が体育授業の好意性は低く，さらに運動経験がない場合は体育授業の好意性はかなり下がっていることも明らかとなった．

表3　先行研究における体育授業の好意性の割合

| 文献 | 調査対象 | 体育に対する好意性 好き（%） | 嫌い（%） | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 三浦ら（2001） | 国・教職・受講生，2回生 | 70.0 | 15.7 | 小学校体育，3件法 |
| 廣兼と平井（2007） | 国・教職・受講生，2・3回生 | 66.9 | 10.8 | 小学校体育，5件法 |
| 川田（2018） | 私・教職・受講生 | 81.3 | 13.3 | 小学校体育，5件法 |
| 福地と中雄（2018） | 国・教職・受講生 | 60.9 | 13.0 | 体育（全体），3件法 |

※：国，国立大学；私，私立大学；教職，教職科目

学生ではなく教師の立場としての報告であるが，白旗ら（2021）は体育授業への自信が低い教師は，体育指導に関する知識の獲得への積極性が少なくなり，自己効力感を獲得しにくくなり，教師としての成長が難しくなると述べている．つまり，学生の立場へ言い換えると，体育授業に対する好意性が低い学生は，体育の指導法に関する授業への参加が消極的になり，授業における学びが少なくなる可能性があると考えられる．本調査の対象であった小学校教科内容論体育の授業は，「器械運動および陸上運動の基礎的運動の実技ができるとともに，その指導法を習得すること」を到達目標としている（小山と西川，2022）が，小学校教員免許状取得に対する必修科目として1回生を対象にしていることも踏まえると，受講学生の体育の好意性に変容を及ぼす内容も含めて授業を展開していく必要性があると考えられた．

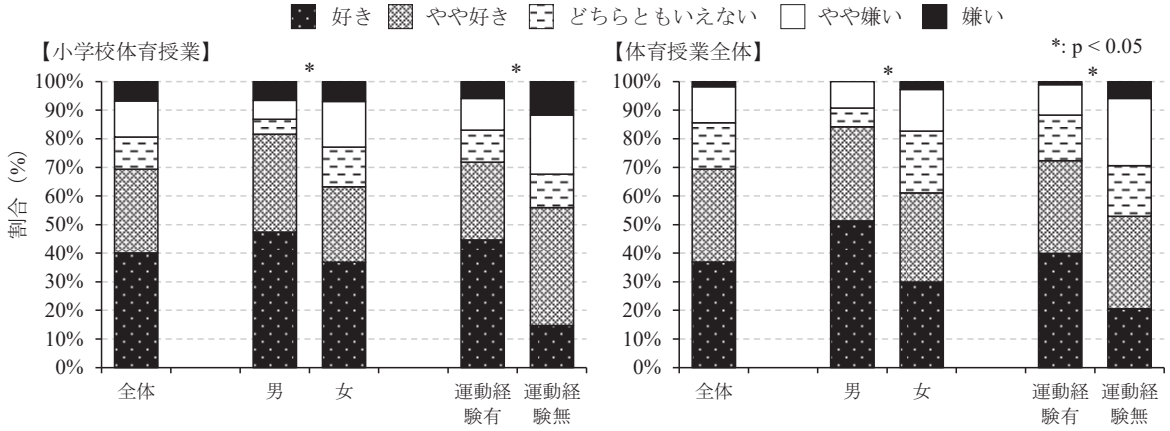


図2　調査対象者の小学校体育授業（左）および体育授業全体（右）に対する好意性と性別および運動経験の有無による体育授業に対する好意性の相違

### 3. 器械運動に対する好意性について

図3は小学校の器械運動で行う種目である「マット」,「鉄棒」,「跳び箱」および「器械運動全体」に対する好意性について，調査対象者全体，男女別，運動経験別にまとめたものである．調査対象者全体では，「やや好き」または「好き」と回答した学生の割合はマットで39.2%，鉄棒で27.9%，跳び箱で45.5%，器械運動全体で32.9%であった．一方で，「やや嫌い」または「嫌い」と回答した学生の割合はマットで45.5%，鉄棒で53.6%，跳び箱で38.3%，器械運動全体で41.0%であった．また，体育授業全体の好意性（図2）と器械運動全体に対する好意性（図3）の割合の比較では，その好意性に有意な差が見られ（$p<0.05$），器械運動に対して「好き」という意識を持つ学生の割合は減少し，「嫌い」という意識を持つ学生の割合は増加した．

男女別では，マット，鉄棒では男女で好意性に差はなかったが，跳び箱では男女で有意差が見られ，女子の方が好意性は低くなり，「やや嫌い」または「嫌い」と答えた学生の割合が女子の方が多かった（$p<0.05$）．また，器械運動全体に対する好意性は男女で差は見られなかった．

運動経験別では，マットでは運動経験の有無で好意性に差はなかったが，鉄棒と跳び箱では運動経験の有無で有意差が見られ（$p<0.05$），「やや好き」または「好き」と答えた学生の割合が経験有りに比べて経験無しの方が

低かった（$p<0.05$）．また，器械運動全体に対する意識は運動経験の有無で差は見られなかった．

これらの結果から，器械運動の好意性は体育全体に対してかなり低くなり，「嫌い」という意識を持つ学生の割合が「好き」と考えている学生を上回り，約 40%もの学生が否定的に捉えている状況にあることが明らかとなった．また，男女別の比較では，「跳び箱」の好意性に男女差が見られたものの，「マット」，「鉄棒」，「器械運動全体」には男女差が見られなかった．すなわち，器械運動の好意性に対する問題は男女共通で捉えていくべき課題であると考えられる．

器械運動はその特性上，技のできる，できないがはっきりとわかりやすい種目であり，その評価が「知識・技能」の観点から行われやすい．本調査では器械運動の好意性に影響する要因を調査していないが，本授業の担当教員である著者の授業資料によれば，受講生の技の習得状況は芳しくなく，例えば，マット運動であれば，「後転」や「開脚前転」，鉄棒では「逆上がり」，跳び箱では「かかえ込み跳び」や「台上前転」など小学校体育で取り扱う基本的な技を十分に実施できない学生が多く，技能水準があまり高くないと認識している学生も多いようである．器械運動では，できなかった場合に意欲の低下が大きいことが指摘されており（松本，2010），学生の技能の獲得状況が器械運動の好意性に影響を与えている要因の 1 つである可能性が考えられる．

また，種目別にみた場合では，割合が低いものの「跳び箱」においては「好き」が「嫌い」を上回ったが，「マット」と「鉄棒」では「嫌い」の方が割合は多く，特に「鉄棒」は半数以上の学生が嫌いという意識を有している状況であった．小倉と長谷川（2018）は教員養成課程の大学生の運動経験と器械運動の学習課題の達成度の関係を検討し．「マット運動」と「鉄棒」は運動経験が課題達成度と大きく関連があり，特に「鉄棒」は小学校から高校までで最も経験が少ない種目であったことを報告している．そして，小学校教員に対するアンケートにおいても，「鉄棒」は授業での実施率が最も低いことが報告されている（長谷川ら，2019）．また，器械運動で求められる基礎的な能力として，逆さまになる・転がる・支える・ぶら下がるなどがあるが，これらは日常生活であまり経験しない運動であること，そして身体の成長が大きい時期に授業での実技経験の不足が生じ，小さいころはできていた技が今はできないということが頻繁に生じること（水島，2004）も指摘されている．つまり，本受講生の器械運動や鉄棒に対する低い好意性には，これまでの授業経験の少なさや継続的に実施される環境が少ないことが影響している可能性が推察された．

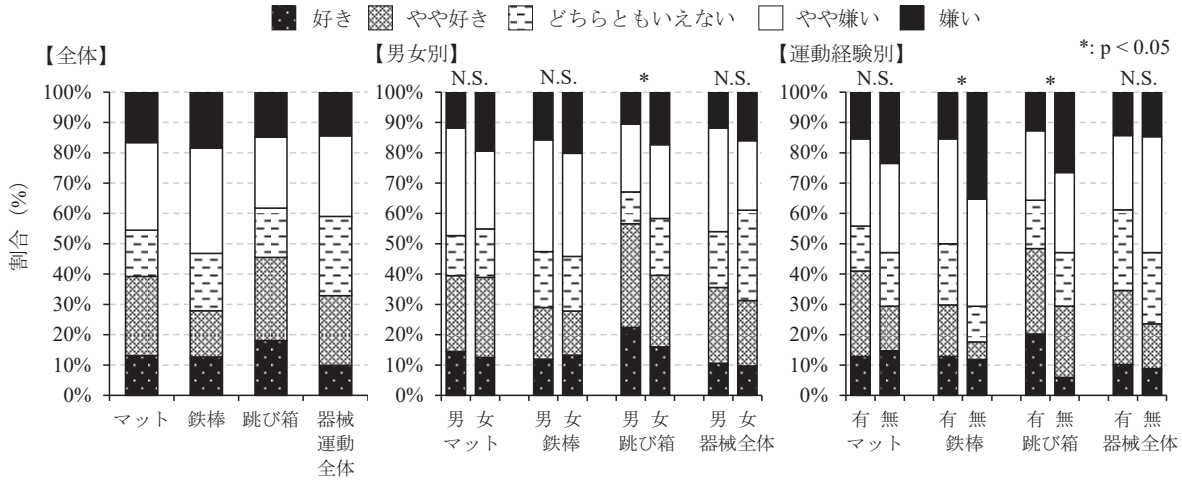


図3　調査対象者の器械運動に対する好意性（左）と
性別（中）および運動経験の有無（右）による器械運動に対する好意性の相違

## Ⅳ．まとめ

本研究の目的は，小学校教員免許状取得のために必修である「小学校教科内容論体育」の授業改善を図る基礎資料として，受講生の体育および当該授業の内容である器械運動に対する好意性を明らかにすることであった．

本研究の結果および考察をまとめると以下のようになる．

・体育授業に対する好意性として，小学校体育授業および体育授業全体を「好き」という意識を持つ学生の割合は，それぞれ 69.4%と 69.3%であり，「嫌い」という意識を持つ学生の割合は 19.4%と 14.4%であった．

・体育授業に対する好意性には男女差があり，男子の方が好意性は高く，女子の方が好意性は低かった．

・器械運動に対する好意性として，器械運動全体について「好き」という意識を持つ学生の割合は 32.9%であり，「嫌い」という意識を持つ学生の割合は 41.0%であった．

・種目別に見た場合の好意性として，「好き」という意識を持つ学生の割合はマットで 39.2%，鉄棒で 27.9%，跳び箱で 45.5%，「嫌い」という意識を持つ学生の割合はマットで 45.5%，鉄棒で 53.6%，跳び箱で 38.3%であり，「跳び箱」のみ好意性に男女差が見られた．

以上の結果から，本受講生の体育授業および器械運動に対する意識として，他大学の教員養成課程の学生と比較して，体育に対して「嫌い」という意識を持つ学生の割合がやや多く，器械運動に対する意識では非常に多くの学生が「嫌い」という意識を持っていたことが明らかとなった．本授業の受講生の約半数は小学校教員を志望しており，卒業後は教員として体育授業を実施することが求められる可能性が高い．小学校教員を志望する学生だけでなく実際の教員においても体育授業の実施に不安を有している場合は多いとされているが，体育授業の指導能力を高めて行くためには，それぞれの種目に対する好意性が高いことも重要であると考えられる．したがって，当該授業を展開していく際には，授業の到達目標である基本的な技ができることや指導法の習得に加えて，受講生の体育や器械運動に対する好意性の変容を促す授業内容が重要であることが示唆された．

なお，本研究は単年度の調査であるために，今回の結果が対象学年以外の学生や次年度以降に入学してくる学生に対してそのまま当てはまるとは限らない．したがって，継続的に調査を行うとともに，現在実施している授業が学生の体育や器械運動の好意性に与えている影響を明らかにするために，授業前後での好意性の変容も調査する必要があり，次年度の課題として実施予定である．さらに，本研究の調査対象者は 1 回生であり，児童に対する指導経験が全くない学生が多いことから，器械運動の指導に対する自信の調査結果は分析対象としなかった．しかしながら，本授業の到達目標の 1 つとして指導法の習得をあげており，授業による指導に対する自信の変容や獲得状況について評価していくことも今後の課題である．

本稿作成にあたっては研究全体の構成を小山，西川，和藤の 3 人で協議して進め，対象授業は西川，小山の 2 名で実践し，執筆は小山を中心として行った．

## Ⅴ．参考文献

福地豊樹，中雄勇人（2018）教員養成大学学生の「体育」認識について考える ―小学校教科専門の授業を通して―．群馬大学教育実践研究　35，125～135.

長谷川晃一，平田佳弘，黒川隆志（2019）学校体育現場における器械運動の実施状況に関する研究 ― 小中高校教員へのアンケート実施を通して ―．環太平洋大学研究紀要，14，57-72.

堀江健二，小林幸子，尾西奈美，池端謙太（2007）器械運動，文化書房博文社.

廣兼志保，平井章（2007）教育学部生による小・中学校体育に対する認識傾向～ 過去 10 年間の調査の比較と体育授業に関する理解・考察の分析から～．教育臨床総合研究，6，77～93.

川田裕樹（2018）「初等科教育法（体育）」受講者における運動への苦手意識と好意性および体育指導への不安 ―男女の差に着目して―．國學院大學人間開発学研究，9，23-37.

木原成一郎，磯崎尚子，磯崎哲夫（2003）教育実習生の小学校体育科指導の心配に関する事例研究．日本教科教育学会誌　25，29-38.

小山宏之，西川啓子（2022）京都教育大学　2022 シラバス　小学校教科内容論体育．https://kyoumu.kyokyo-u.ac.jp/2022/syllabus/13001091_aa_Ja.html（2022 年 8 月 23 日閲覧）

京都教育大学（2022）履修案内 2022 年度（2022 年度入学者用）．京都教育大学　教務課.

松田恵示（2016）「遊び」から考える体育の学習指導．創文企画.

松本格之祐（2010）．器械運動の教材づくり・授業づくり　高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖（編）新版

体育科教育学入門　大修館書店.
三浦裕，小林禎三，片岡繁雄（2001）教科専門科目「小学体育」に対する受講学生の意識・態度について．北海道教育大学紀要，教育科学編，52（1），197-208.
宮平喬（2017）「小学校体育実技の示範能力に関する調査–器械運動に関する技能の自己評価–」．筑紫女学園大学教育実践研究，3，153-160.
水島宏一（2004）器械運動の指導に関する研究．東京学芸大学紀要 第 5 部門 芸術・健康・スポーツ科学，56，103-119.
小倉晃布，長谷川 晃一（2018）教員養成課程における「器械運動」受講生の運動経験と学習課題達成度の関係に関する運動学的考察 ― 受講生 272 名へのアンケート調査と学習課題達成度をもとに ―．環太平洋大学研究紀要，12，51-59.
文部科学省（2015）平成 26 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果.
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1368239.htm（2022 年 8 月 24 日閲覧）
文部科学省（2018a）小学校学習指導要領解説 体育編，東洋館出版社.
文部科学省（2018b）平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果.
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1401184.htm（2022 年 8 月 24 日閲覧）
白旗和也，大友智，西田順一，原祐一（2021）小学校体育科における教師効力感を高めるコンサルテーション方略の開発及び有効性の検討：体育指導効力感尺度の開発を通して．体育学研究　66，869-890.